

えいちゃんくらぶって？

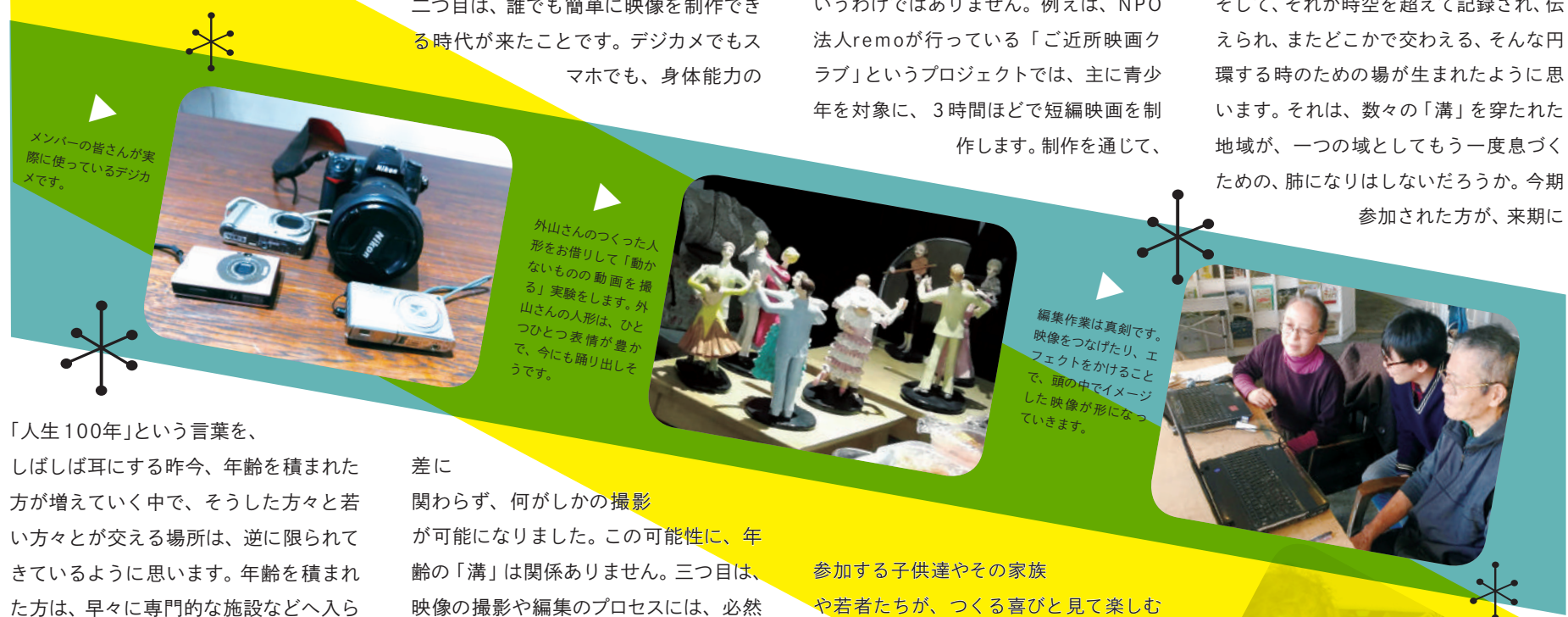
「えいちゃんくらぶ」は、映像をつくることをきっかけに、世代や年齢を超えたコミュニケーションの場を、地域に開くアクティビティです。映像制作を通じて、関わられた方々が、そして各人の今とメモリーが、「ちゃんぽん」されていく、そんなイメージで名付けました。

れて以来、世代や年齢を超えて、多くの人々を魅了してきたからです。現代社会に生きる人々は、どんな人も何がしかのかたちで、映像を経験しています。そのため映像は、ふだん離れている者同士が、何か共通する体験として考えやすいもののひとつとなっているように思います。二つ目は、誰でも簡単に映像を制作できる時代が来たことです。デジカメでもスマホでも、身体能力の

目標は、素晴らしい「名作」を創ることでもなければ、年齢を積まれた方の趣味を育むことでもありません。もちろん、名作の誕生や趣味の充実を否定するものではありません。しかしむしろ、映像を、時空を超えたコミュニケーションの場を開くために、積極的に使うこと、この使用のプロセスに重点を置いています。

ちなみに、このような試みは、史上初というわけではありません。例えば、NPO法人remoが行っている「ご近所映画クラブ」というプロジェクトでは、主に青少年を対象に、3時間ほどで短編映画を制作します。制作を通じて、

に埋められ、育み、それは芽を出し、花開き、実りました。そこには、「高齢者」という年齢の「溝」を設定することがカバクになるような、水平的な交わりの場が広がりました。それぞれの方の、人生のメモリーや日常のエピソード、サポートメンバーとの交流、ハツとさせられる映像や延々とつづく映像、撮影こぼれ話、また住んでいる家やまちや地域、その風景、そういった雑多なものが凝集して織り交ざる、そして、それが時空を超えて記録され、伝えられ、またどこかで交わる、そんな円環する時のための場が生まれたように思っています。それは、数々の「溝」を穿たれた地域が、一つの域としてもう一度息づくための、肺になりはしないだろうか。今期参加された方が、来期に



「人生100年」という言葉で、

しばしば耳にする昨今、年齢を積まれた方が増えていく中で、そうした方々と若い方々とが交える場所は、逆に限られてきているように思います。年齢を積まれた方は、早々に専門的な施設などへ入られ、またテクノロジーの変化や文化の多様化に追いつける若い方は、その成果を享受する一方、その話が通じない他者とは出会いにくくなっています。こうして世代や年齢による溝が深まるなか、それぞれの生活環境は閉塞していき、その内なる渾は溜まる一方で、そしてふと、陰惨な事件となって発露してしまったり、他者への過剰な侮蔑として発散されたりしてしまうように思います。歴史的かつ社会的に構築されてしまったこうした「溝」を、今、もう一度、埋めていくことはできるのでしょうか？この問いは、読者のあなたも書き手の私も、まずは自分がこの「溝」に落ち込まないために、今を生きている者として考える必要のあることだと思います。

私達が注目したのは、映像でした。その理由は四つあります。ちょっと多いのですが、お付き合い願えましたら。まず一つ目は、映像が、19世紀末に発明さ

差に関わらず、何がしかの撮影が可能になりました。この可能性に、年齢の「溝」は関係ありません。三つ目は、映像の撮影や編集のプロセスには、必然的に他者を巻き込むことになるので、コミュニケーションが生まれやすいという利点からです。この点で、映像は写真よりも、他者を巻き込む度合いが相対的に大きいと言えます。単純に言って、映像制作には時間と労力がかかるため、他者の協力を必要とする場面がより多くあるからです。四つ目は、映像には必ず記録が伴うという点です。撮影された映像は、メモリーとして保存できます。保存しなかった場合ですら、解析できないほど極めて小さな痕跡として、ディスク上に刻まれています。記録されることで、映像は、時空の移り変わりから自由になり、時空を超えて、世代や年齢を超えて、伝達されたりコミュニケーションを引き出したりします。

「えいちゃんくらぶ」が特に注目するのは、この映像の時空を超えた働き、そしてコミュニケーションの契機としての機能です。そして「えいちゃんくらぶ」の

参加する子供達やその家族や若者たちが、つくる喜びと見て楽しむ喜びを共有しながら、交流を深めていきます。技術や知識がなくても映像を「使う」ことは誰にでもできる、その知恵を、私たちのプロジェクトも共有させていただき、順撮りでの撮影やテイクを重ねないなど、remoさんが編み出してきた手法を参照させていただいた場もありました。

当初、私達は、初年度のプロジェクトであることも踏まえ、まずは70歳以上というメンバーの年齢制限を設定しました。一般に「高齢者」と呼ばれる方に限定することで、社会における既存の「溝」を可視化し、アクティビティが進む中で、年を重ねたメンバーと若手のサポートメンバーとが交流していくうちに、その「溝」がどのように変化していくか、捉えるためです。そして、私たちの設定した当初の「溝」は、ポジティブに突き崩されていきました。メンバーの方々は、撮影や編集に触れ、その技を習得していくなかで、次第に自分も他の方も楽しむ創造の種を「溝」

は新しいメンバーを教えたり、そのメンバーと協力したりでき、また来々期は、さらに新しいメンバーが加わり、それまでのメンバーと交わっていく、そうして「えいちゃんくらぶ」は自律的に離陸していくことでしょう。時空を超えただこかへ、そのどこかは、あなたの、私の、今いるここに他ならないのですが、それは円環する時の息づく場なのです。

今期はすでに4カ月を経ましたが、これからも「えいちゃんくらぶ」は、こうして種を引き継ぎながら続いていくと思っています。

profile
角尾 宣信(つのおよしのぶ)
東京大学大学院総合文化研究科、博士課程在籍。戦後後日本の喜劇映画や風刺映画を研究。また、都内や近郊にある複数の介護施設にて、高齢者の方とお話ししながら、楽しく昔の映画や歌謡曲を鑑賞するプロジェクト「シルバースネークバグダス！」を主催。
主な論文に、「破壊した「人間宣言」——『グラマ島の誘惑』における天皇および天皇制風刺について」(川崎公平ほか編「川崎三は二度生まれる」水声社、2018年所収)などがある。

小金井アートフル・アクション！とは（小金井市芸術文化振興計画推進事業）

小金井アートフル・アクション！は、2009年4月に「誰もが芸術文化を楽しめるまち～芸術文化の振興で人とまちを豊かに」という理念を10年間かけて実現することを目指して始まった小金井市の計画です。この事業は、市民がアートと出会うことによって日常生活の中に新たな発見をし、自らの潜在能力に可能性を見出すこと、そして、それが心豊かな生き方を追求するきっかけとなることを目指しています。そのために、次に示す3つの方針を定めています。

- 1.毎日の暮らしの中で芸術文化活動に出会う機会を整備し、活動を支える基盤をつくること
- 2.市民のみなさんが活動を実践することのできる場をつくること
- 3.活動と一緒に担っていく人々が学びながら、体験しながら活動できる機会をつくること

この理念と方針により、市内にアーティストを招き市民のみなさんと街を舞台に作品の制作や発表をしています。特に2013年度からは、保育園や小学校、市内各所を舞台にアーティストや子供達、市民による豊かな体験の場と機会をつくる活動がひろがっています。この事業はボランティアの市民のみなさん、小学校、保育園などの教職員のみならず、近隣NPO等が協働してすすめています。小金井市芸術文化振興計画の計画書は以下から見るができます。URL <https://www.city.koganei.lg.jp/kankobunka/453/geijutubunkasinkou/geijutubunkasinkoukeikaku.html>

●本事業に関するお問い合わせ
NPO法人
アートフル・アクション
TEL.FAX:050-6327-953
HP:<https://artfullaction.net>
Email:mail@artfullaction.net

●小金井市芸術文化振興計画
についてのお問い合わせ
小金井市コミュニティ文化課文化推進係
TEL:042-387-9923

まちはみんなのミュージアムだより

小金井アートフル・アクション！は「だれもが芸術文化を楽しめるまち！」の実現をめざして2009年にスタートしました。まちは、そこに暮らすみんなのミュージアム。「まちはみんなのミュージアムだより」では、おどろきと発見、わくわくする活動のようすを伝えます。

主催：東京都／小金井市／アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
／NPO法人アートフル・アクション
企画制作：NPO法人アートフル・アクション

※本事業は「小金井市芸術文化振興計画推進事業」及びアーツカウンシル東京「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

KOGANEI
ARTFULL
ACTION!
NEWS LETTER
FEB.2019
VOL.06
《TAKE FREE》
ARTS
COUNCIL
TOKYO

今まで映像を撮ったこともなかったメンバーの皆さんが、この約半年の間に映像に触れ、つくり、遊ぶ中から生まれた感性豊かな作品たちを一挙上映する「えいちゃんフェス」を開催します！ぜひ足をお運びいただき、映像の持つ可能性や、撮る、つくる、見る面白さをご堪能ください。



「映像」×「メモリー」×「ちゃんぽん」=えいちゃんくらぶ

誰でも簡単に映像が撮れるようになったこの時代。映像を撮った経験はないけれど「新しいことにチャレンジしたい」「地域に仲間をつくりたい」などと考えていらっしゃる概ね70歳以上の方々と、映像制作についてははじめの一步からともに学び、映像に触れる・つくる・遊ぶクラブを、2018年10月にたちあげました。

世代や性別の「溝」を埋め、創造の種が花開く

私達はこれまで、幼児や小学生、幅広い市民の方々とさまざまな活動を行う中で同じまちに暮らしているながら、いわゆる高齢者といわれる世代の方たちと触れあう機会が少なく感じていました。まちには多様な世代の方がいるのに、どうしてなかなか出会えないのしょう？まちの中には高齢の方を対象としたお稽古事やワークショップがいろいろありますが、講師から参加者に教える・与えるという一方通行のスタイルが多い印象があります。それは、高齢者＝老い＝“できないことが当たり前”のような空気が、今日の社会の中にしみわたっているからかもしれません。しかし、積み重ねてきた経験は宝物であり、たくさんの宝物を持っている高齢者の皆さんが、新しいことにチャレンジしなきやもっ

たくない！えいちゃんくらぶは、現在、概ね70歳以上の「メンバー」5人と、10代から60代の「サポートメンバー」6人と講師の角尾宣信さんとともに活動しています。メンバーとサポートメンバーはヒエラルキーのない水平な関係の中で協力しながら、撮影や編集をともに楽しんでいます。メンバーは、デジカメで動画が撮れるなど思いもしなかったという方ばかりですが、趣味も個性も映像への興味の持ち方もさまざまで、それぞれの「やりたい」を映像という形で集めて編集し、毎回本当に素敵な作品が生まれます。また、お互いの作品を鑑賞し、おやつを食べながら感想を和気あいあいとシェアし合う時間は、メンバーにとってもサポートメンバーにとっても、お互いの創造への意欲や、好奇心、チャレンジ精神を刺激するとともに、エネルギーをもらえる貴重な時間となっています。えいちゃんくらぶでは、映像というツールが、年齢や性別を超えたコミュニケーションやエネルギーが循環し、緩やかなコミュニティの形成へとつながっていく可能性を探りつづけています！

えいちゃん Interview

映像を撮ることが初めてだったメンバーの皆さんにとって、えいちゃんくらぶに参加したことはどんな体験だったのでしょうか？率直に語っていただきました。

山本さん—— 映像を撮ったこともないし、何をやっているのかあんまり把握できていなかったんですけど、12月に見学のつもりで来て、このタルタルとした雰囲気が好きで、参加することにしました。



Mrs. Yamamoto

ドキュメンタリー番組を見て、作り手の思いを感じるようになりました。

■実際に撮ってみていかがでしたか？

まず最初に、意識的に撮るってこんなに違うものなんだな、と思いましたね。運動会などで自分の子供を中心に撮っていたときと全然違って、撮るってことの意味がね、構図を考えたり、枠の中の画像が違ような感じ。

■今回、織物のドキュメンタリーを撮ることにしましたが、きっかけは？

身近なところに映像として残しておきたいというのが全然ないんだなと思ってたときに、織物を教わっている「虹の家」の主催者の金子さんに相談したら、賛成してくれて撮ることにしました。「虹の家」紹介フィルムも撮ってもいいよね、という話もしています。

■えいちゃんくらぶがまちの広報みたいな役割を担ってもいいんじゃないかという気がしますね。

紹介のビデオって、作品よりも具体的にいいですよ。

■初体験的なことはありましたか？

ドキュメンタリー番組が好きなんですけど、これを映したいがための伏線というか、そういうものを感じるようになりました。どういうふうに言ったらいいかわからないけど、つくる側の見方というか、そういうのが出てきたような気がします。あと、意外と、ズームしたりバックしたり、機能があるのでついやりたくなるんだけど、ドキュメンタリーに関しては、基本的にはやらない方がいいんだって、私自身映像を撮っていて思ったの。ズーム機能って、ぎゅってなるじゃないですか、あれが嫌なんです。ね。

■ディゾルプ^{※1}が面白くなったという話もありましたが？

■やってみてからの印象はどうか？

夕焼けの風景って、単純だけど、合わさっていくと、重なりが複雑な感じがして、すごく面白かったんですよ。でも、風景では

いいかもしれないけど、織物の方では少なくていい。つなぎの部分はばきつと切らないように、でも、織物はつくり方の基準があるから、ぶつと切ってもいい気がします。角度を変えたり横から撮ったりできるといんだけど、慣れてくればだんだん大胆に、「撮っちゃった」って言うちゃえば大丈夫かな、と思います。

てるちゃん—— 所属している別のサークルから配られたパンフレットを見て、映像やデジカメを使うというので興味を持ちました。そのサークルのメンバーに写真を専門にやる人が何人かいて、僕もカメラをやるんで、写真部に誘われたんです。でも、写真部の皆さんは動画は全然やらないっていうんで、だったら僕一人でもやろうかな、と思って。今までみたいにならなくて、ぼつと一枚ずつ撮るんじゃないかな、って持っていたカメラで動画が撮れるなんて思わなかったんですよ。でも、説明書を見ながらやったら撮れて、動きそのものはまだまだ未熟なんですけど。

■この間撮ってきた動画では、パン^{※2}の安定感が素晴らしい。

いやいや、やっぱり数多くやらないと、いきなりいいものが作れるわけじゃないですから。



Teru-chan

動画っていうのは、デジカメで撮るんじゃない、8mmのカメラで撮るのが普通だと思うんですけど、でも動画が撮れるというのがね、まだ始まりだけど、おどろきでした。動画って、動かないじゃないですか。写真一枚だと固定されるじゃないですか。それが、ちょっと動くことによって今まで一枚だったものが、続きができますよね。そういうところがえいちゃんくらぶを受講してよかったな、というところですね。

■スナップショットだと一時点一時点の写真になるけど、その間の何かを撮れるっていうのがいいということですね。てるちゃんはパンをするのがお好きなかな、と思っ

ていたんだけど、スナップショットとスナ

ップショットの間を撮るっていう気持ちがあるんですね。

■大変だったことは？

好きな映画のワンシーンのように映像を編集できるのが面白いです

浅草行ったときに、浅草寺がすごい人で自分が動けないんですよ。ただ立てズームやったり自分で撮ったりしかできなかった。撮ってきた映像のつなぎがまだできてないんでね。3コマぐらいをひとつの流れにできてきたらいいな、と思ってます。

■てるちゃんのPCは、読み込みが遅くて編集が進んでないので、どこかのタイミングでやりましょう。

動画は、固定された写真の「続き」が撮れるんですよ。

坂本さん—— いつも楽しいです。市報を見たのが、最初のきっかけだったと思うんですけど、70歳以上はびったりだし、今までの経験がなくていいということで、撮れるようになれなくても、動画ってどんなふうにも編集したり、つくるんだらうと、それだけでもわかればいいなと思いました。私は映画が好きで見るとですけど、つくるのは全然わからないので、つくり方の基礎的なことが知れたら見方が変わるかな、と。

それがきっかけです。見方、変わったと思います。場面の展開が、「あ、こういうふうに変えようとちょっとおもしろい感じがするな」とか、そういう見方ができるようになった。今までそういう見方をしたことがないので、大げさに言えば、つくっている人の、よく考えてるな、とか、そんなことまで思ったりして、話が深くなった気がします。

■ご自分でもばりばり編集されています。やってみると面白いんですよ。いろんなことが、しかも簡単にできちゃう。例えば、映画の場面展開も、自分で実際にそういうことができてしまう。とっても遊べますね。私にとっては、ストーリーをつくるのは難しいけど、逆に編集をいろいろやってみるっていうのが面白い。ある意味、職人的な仕事っていうかね、それを自分でもやってみて、面白いなあ、っていうことに自分でも初めて気が付いて。音楽も入られるでしょ。「あ、これ使えるな」とか思



Mr. Sakamoto

てみたり、音楽で印象が変わりますね。

■坂本さん、機材をいじるのがお好きなんじゃないですか？

退職して、メールとネットはできたほうがいいな、と思ったんです。ド素人だししょうがないから自分で調べていじって覚える習慣ができました。そうしたら、勤が働くようになって、今回の編集ソフトも使えるようになったんです。カメラを撮るのも、結構面白い。独創的な映像はできるわけじゃないけど、映画のまねができるんですよ。バクリ。

■オマージュですね(笑)

そうそう、オマージュなんですよ。自分もやってみたくるし、あ、できたな、みたいな。

■先日撮影されてきた、あの喫茶店の映像は？

あれはニューシネマパラダイスのオーブ

ニングですよ。まあ、そういう楽しみがあったって、場面の展開を考えるのが面白いです。

と、つらいことは？

つらいこと、ありますね(笑)。年のせいかしら、ケーキづくりのシーンを撮ってた

なみさん—— きっかけは市報です。やっぱり映画が好きで、映像、70歳以上、ということで、ジャストそうだったんです！映像の仕組みが少し勉強できればいいかな、でも数回は高そうだな、



Nami-san

映像が気軽に撮れることにびっくりしました。

ら、なんかくたびれちゃってねえ、ドキュメント撮る人って大変だなあ、すごく体力が必要だなあ、ってつくづく思いました。

■楽しかったことは？

私パソコンいじるの苦手なんですけど、隣に主人(坂本さん)がいてくれて、すごい詳しいんですよ。

■今さらですか？(笑)

新発見しました。イメージを思い描くのは簡単じゃないですか。あ、こうだといいな、とか、音楽も、とか。それが実際にできると嬉しいんですよ。ああ面白いな、と思って。

映画見ても、何となく、早回し的なものがあったりとか、切り替わりがきれいだなとか、今までボヤッと見ていたものがもうちょっと丁寧に見えてるかもしれないです。あんまり意識してないですが、

映像が気軽に撮れるという体験にはびっくりしました。うちにデジカメあったけど、映像は撮ったことない、それができるということを知らなかったです。だから、室の持ち腐れでね、今の機械ってすごいですよね。私スマホはいつも持ってるんで、木が揺れたりする様子など、たまに動画を撮るようになりました。今まで思わなかったこ

■実際にカメラを自分で手にして、楽しいこと

機材関係の心強いサポートだけでなく、細やかな心配りをしてくれているスタッフの村松さん(ニックネーム:マスター)は、えいちゃんくらぶに何を見ているのかな？角尾さんとの会話をちょっとだけのぞいてみました。

マスター(以下マ)：皆さん、回を追うごとに打ち解けてきた感じがありますよね。メンバーの皆さん、自分の撮った映像を「つまらない」「面白くない」っていうんだけど、見たらめっちゃ面白い。自分にとって面白くないものが、ほかの人が評価したら自分と全然違う評価になるんだ、評価する人の存在によってさらにどんどんいいものができていく、っていうのは、自分にとってはすごく衝撃的でしたね。映像には、皆さんの生きてきた、ギュッと詰まっものが出てる。それがやっぱりちょっと年配の人とやることの価値だな、と思いました。

角尾さん(以下つ)：映像を撮ることで、他人の目線というのが入ってくるのがいいですね。皆さんの映像は毎回面白くてね。こだわがありますよね。**マ**：そういうのをもうちょっとうまく引き出してあげるところが、今後続けていくポイントなのかな。

つ：引き出しを開ける、とっかかりですかね。当初はカラオケ映像を作ってみようとか、そんな計画もあったけど、それどころではなく、みんなどんどんやるから、毎回成果を見させてもらっている感じで、こっちが楽しませて

とですね。動画じゃないと伝わりにくいこともありますよね。

外山さん—— 市報を見て、写真は好きでたくさん撮っていたんですけど、動画は撮ったことがなくて、動画が撮れたら楽しいかな、と思って応募しました。それでも、ずいぶん迷ったんです。どうせ大勢応募者がいて落ちるだろうと思って応募してみたらOKで、どうしようと思って(笑)まず、どういう趣旨でこれを計画してくださったのか、ただ無経験の高齢者に映像を撮る楽しさを教えてくださるっていう趣旨なのか、何か別の目的があるのか、そのへんはいまだに謎です。果たしてその企画に、特に私なんか応えてないんじゃないかと思って。

■外山さんいつも遠慮がちだけど、映像の方は結構大胆っていうことが多いので、あんまり信用してないですけど(笑)

映像のセンスは、私、いつも場違いだなと思いつつここにるので、ちょっと困

るんですけど。撮ってる最中は映像としていろいろ考えるんですけど、ただ何せ一人で全部考えてるので、限度があるなっていうのを感じます。かといって、何人かを巻き込んでやるほど自分の覚悟ができていないし、今は一人でできるマキシマムでやる以外ないなと思ってます。

■実際に参加していかがですか？

いただいている感がありますね。**マ**：初めは、もっとこっちが、機材をそろえて手を出さなきゃかと思っていたけど、今のところはそうでもないですよ。この後は、どう編集をサポートしていくのがですね。**つ**：あと、参加された皆さん、えいちゃんくらぶに参加して自分で撮影をする中で、ふだんの映像の見方が変わったと言ってきて、こんなふう新しい映像との関わりができるのはいいな、と思いました。今回時間をかけてやったからこそ成果がいろいろあり、継続性という意味では、今後も続けていってほしいな、と思います。

マ：見方が変わるのと同時に見せ方も変わるんだらうし、作品が面白いことがわかれば、と思うんですよ。

つ：今度実際に展示して、この活動をもう少し広く広報できればいいんじゃないかと思

います。みんなに知ってもらって、広がっていくといいなあ。

ずいぶん、柔らかな、というか優しい企画ですよ。こんな企画があるっていうのが、ちょっと不思議な感じで、不思議なところに自分があるな、いつも思っています。で、のんびりした雰囲気浸って

られて、なんか撮らなきゃいけない、と思って撮るんですよ。自分で動画を撮ろうっていう意図で歩いている、わざわざ早起きして(笑)

あとは、直接関係ないんですけど、テレビ見ても他の映画を見ても、撮る角度とか撮り方が気になりますね。最近。今までは漠然と見てたのに、画面が切り替わるのに

それでも物語としてつながっていく、カメラの切り替えがずいぶん気になります。プロの人はすごいな、と思えば思うほど、自分の撮った映像を人に見せるのはどうかな、って、そこにいつも行きついています。

角尾さんのアドバイスで、この間撮ってきたウクレレの先生の映像を早速DVDに

して先生に差し上げたら、喜んでくださいました。だから、好きなものを撮ってあげて、そういう楽しさはあるなと思

いました。

映像を撮ってあげて、喜んでもらえる楽しさはあるなと思いました。



Mrs. Toyama

MASTER

3月2日 3/11 撮影 3/24/15



MASTER

※1 ディゾルプ：2つの映像が消えながら入れ替わる画像転換の技法

※2 パン：カメラを固定したまま水平方向に動かす映像の撮影技法